

待つ

菅田 忠志

日焼けしたどこかのおじさんの姿に、母の後ろに隠れて顔を少しのぞかせるのが精いっぱいであった。三歳頃だったときに、父が戦地に出征していった当時の記憶はとつていなく、四年を経て戦地から帰国した父との再会は、「初対面」でしかなかった。

「ほれ お父ちゃんやや……」と言われても、立ちすくんだ足はすぐには動かず、そのままの姿勢を続けるしかなかった。

母の実家に疎開をし、住まわせてもらっていた昭和二十一年の秋だったと記憶している。

終戦後一年以上が経過し、次々に帰国してくる多くの兵隊さんたちの知らせの中、父の帰国については何の便りも届かないあせりと不安が頭から離れず、母や伯母が、何をやるにも手がつかなかったのだろう。

- 1 -

「あの頃は、叔父さんのことを私の母も本当に心配していたよ」と、最近になって、当時神戸に残り住んでいた、伯母の娘である7歳年上のいとこから聞かされた。

当時の母は、父の出征後の四年間は、一日千秋の思いで父の帰国を待っていたに違いない。

疎開をしていた頃は、田舎といえど、どこの家も耐乏生活を強いられていたため、母は育ち盛り、食べ盛りだった姉と私の二人の子供を抱えて、借りた田畑や、あちこちの畑仕事の手伝いをさせてもらい、少しばかりの野菜やイモを得ながら必死に育ててくれた。

夕食後に入る風呂の中で、母は力サ力サになった手を見せながら「あゝあ くちやくちややなあ」と言って、姉や私の手をその手に重ねて笑っていた。

父は、帰国後神戸で伯母家族の家に居候をしながら、出征前の塗装業の仕事場に復帰していた。頑張った父は、一年後には伯母さん夫妻の援助も受けて、

- 2 -

6畳一間という小さなものであったが、待望の家を
買い、その後生まれた弟と親子4人を疎開先から迎
えてくれ、一家5人水入らずの生活が始まった。こ
の日を母はどんなに待っていたことだろう。

最近、私が好んで口ずさむ「高橋 真梨子」の曲
に、「それから……マリーと海」というのがある。

この曲は、彼女がデビューした頃に大ヒットした
「5番街のマリー」の30年後をイメージして作られ
たものらしい。

子供の頃に、理由あつて別れた母への思いを、せ
つないメロディーで歌っている曲で、この歌詞の中
に、「再び会えるなら、母と海を見たい……」といつく
だりがある。今、私はこの曲を口ずさむとき、「再び
会えるなら、母とあの頃を語りたい……」と思つ気持
ちに置き換えながら歌っているように思ふ。

その母も父の元へ逝つて5年になる。

おふくろ ほんとうにありがとう。